

過活動膀胱に猪苓湯が奏効した一例



大藪 真理子 先生

まりこ泌尿器・漢方内科

2008年 三重大学医学部 卒業、名古屋記念病院 臨床研修医
 2010年 名古屋大学附属病院 泌尿器科 医員
 2011年 市立四日市病院 泌尿器科 医員
 2014年 米国ロングビーチ・メモリアル病院にて研修
 2015年 一宮市立市民病院 医長
 2019年 まりこ泌尿器・漢方内科 開業

はじめに

高齢者における過活動膀胱／頻尿は加齢現象と関わっていることから潜在的に多くの罹患者が存在すると考えられる。過活動膀胱に対しては、原因疾患の加療と西洋薬による対症療法、生活指導が行われる。西洋薬の効果が乏しい場合や、副作用で治療が継続できない場合に漢方療法は有効である。

症 例

症 例：78歳 男性。

主 訴：夜間頻尿(3回)、残尿感、尿勢低下。

現病歴：X年12月に上記の主訴で受診した。かかりつけ医にて八味地黄丸の処方を受けたが効果を実感しなかったため、他の漢方薬による治療を希望された。症状は残尿感(+)、排尿痛(−)であり、四肢の冷え(−)であった。 α 1遮断薬を服用している。高血圧症、脊柱管狭窄症の既往がある。

西洋医学的所見／東洋医学的所見：図1に示す。

臨床経過(図2)：初診時所見にて前立腺肥大症(重症)と診断した。ご本人と相談し、西洋薬の治療が不十分であることから、まずは前立腺肥大症の治療としてデュタステリド、タダラフィル、ビベグロンの服用を開始した。X+1年4月にはご本人が自動的に排尿日誌を付け始めた。夜間尿回数は一晩に平均1.4回、一回排尿量は

218.5mLであった。しかし、X+2年2月に夜間頻尿が増加(一晩に平均1.8回、一回排尿量は206.9mL)したために何か手を打ちたいとのことで、受診時の本来の希望であった漢方治療の併用を検討し、クラシエ猪苓湯 6.0g/日(分2)の服用を開始した。X+2年4月には夜間尿回数は一晩

図1 症例 78歳 男性

主訴

夜間頻尿(3回)、残尿感、尿勢低下。

西洋医学的所見

尿検査：正常。

OABSS：1-2-1-0 合計4点(軽症)。

腹部エコー：前立腺体積 55mL(重症前立腺肥大症)。

血液検査：PSA 2.8ng/mL(正常)。

東洋医学的所見

体格：中肉中背。

脈候：やや沈。

舌候：淡暗舌、黃膩苔(+)、舌下静脈怒張(−)。

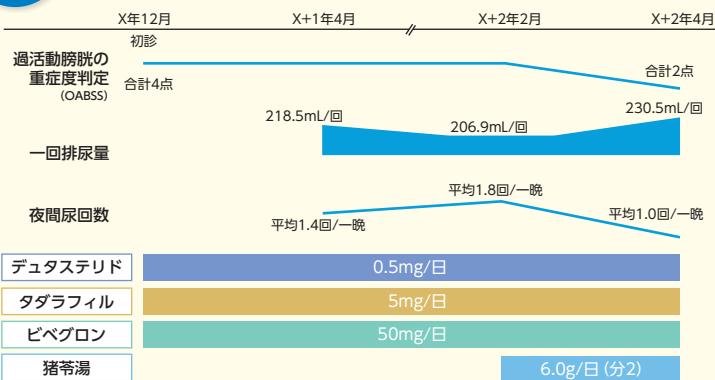
腹候：腹力中等度、心下痞(−)、胃部振水音(−)、

胸脇苦満(−)、臍上悸(−)、

下腹部に硬結・圧痛点(−)、小腹不仁(+)。



図2 臨床経過



に平均1.0回、一回排尿量は230.5mL、OABSS 1-1-0-0合計2点(軽症)であり、1年前の同時期(X+1年4月)と比較しても明らかに症状は改善した。

考 察

－猪苓湯－

猪苓湯は3世紀初頭の張仲景医書が出典で、『傷寒論』陽明病篇・少陰病篇、『金匱玉函經』、『金匱要略』消渴小便利淋病篇に記載されている。猪苓・茯苓・滑石・沢瀉・阿膠の五味からなる処方で、清熱利水の効果を有する。君薬の「猪苓」はチョレイマイタケの菌核で、「猪苓湯」や「五苓散」に配合されている。『神農本草經』では「中品」に分類され、利水作用が強い生薬である(図3)。

－排尿の異常と「膀胱湿熱」－

水邪と熱邪が結びついて下焦に停滞したことから起こる頻尿、残尿感、膀胱の違和感の症状を「膀胱湿熱」や「下焦の湿熱」という。猪苓湯は「膀胱湿熱」や「下焦の湿熱」に対して猪苓・茯苓・沢瀉で利水、滑石・沢瀉・猪苓で清熱し、熱邪によって消耗した陰には阿膠で補陰を行うことで効果を発揮する。猪苓湯は、「膀胱湿熱」の代表処方である(図4)。

結 語

本症例では、腎虚のある前立腺肥大症／過活動膀胱の男性患者に対し、従来の西洋医学的治療を十分に使用したのに猪苓湯を追加することで、夜間尿回数の低下と一回排尿量の増加を認めた。

図3 猪苓湯

利水止瀉・消腫

- 【猪苓】
チョレイマイタケ
(サルノコシカケ科) /菌核
- 【茯苓】
マツホド
(サルノコシカケ科) /菌核
- 組織中の水分を血中に吸収して利尿により除き、浮腫を消退させる。

清熱

- 【滑石】
天然の含水ケイ酸アルミニウム及び二酸化ケイ素などからなる鉱物
- 【沢瀉】
サジオモダカ
(オモダカ科) /塊茎
- 軽度の抗菌・消炎作用を有する。

滋陰補血・止血

- 【阿膠】
ロバの毛を去った皮、骨、腱や韌帯を水で加熱抽出し、脂肪を去り、濃縮還元したもの
- 体を滋潤・栄養し、また止血に働く。

- 猪苓湯は3世紀初の張仲景医書が出典で、『傷寒論』陽明病篇・少陰病篇や『金匱玉函經』、『金匱要略』消渴小便利淋病篇などに記載されている。
- 猪苓・茯苓・阿膠・滑石・沢瀉の五味からなる処方で、主に清熱利水の効果をもつ。猪苓・茯苓・沢瀉で利水し、滑石・沢瀉・猪苓で清熱する。熱邪によって消耗した陰については、阿膠で補陰を行う。

図4 排尿の異常と「膀胱湿熱」

- 水邪と熱邪が結びついて下焦に停滞したことから起こる、頻尿、残尿感、膀胱の違和感の症状を「膀胱湿熱」「下焦の湿熱」という。
- 猪苓湯の君薬の「猪苓」は、チョレイマイタケの菌核で、「猪苓湯」や「五苓散」に含まれる生薬である。『神農本草經』では「中品(中藥)」に分類される。薬効は、利尿作用が強く、清熱効果を併せ持つ。
- 猪苓湯においては、猪苓と滑石と沢瀉で清熱し、猪苓・茯苓・沢瀉と滑石が利水することで効果を発揮する。
- 猪苓湯は「膀胱湿熱」に対応する代表処方である。

Discussion

木村:八味地黄丸が無効で猪苓湯が有効でしたが、先生はこれをどのように解釈されますか。

大藪:本症例の舌候は「黄膩苔」で湿熱の徵候があり、「膀胱湿熱」があつたことから猪苓湯が有効と考えました。

木村:猪苓湯は急性膀胱炎など短期間に使用することが多い処方ですが、長期間使用する場合の注意点を教えてください。

大藪:冷えがある患者さんでは症状が改善したら減量や短期間の使用にとどめることが必要です。

木村:腎虚のある過活動膀胱には八味丸も鑑別に挙がると思いますが、いかがでしょうか。

大藪:冷えてトイレが近い方には八味丸、膀胱湿熱がある場合には猪苓湯を使用します。腹部エコーで膀胱壁がむくんでいる場合は八味丸に猪苓湯を一時的に併用することもあります。

木村:西洋薬に漢方薬を併用するメリットをどのようにお考えですか。

大藪:抗コリン剤では口渴や便秘、吐き気などの副作用が現れることがあるため、治療の継続が難しい場合が多いですが、漢方薬はそのような副作用は少なく有用です。